

胆 道 系

荒 木 力*

胆道の画像診断としては、非侵襲性でスクリーニング検査としての性格の強い従来の胆道造影（経口および静注）、超音波検査および核医学検査（ ^{99m}Tc -PI, ^{99m}Tc -HIDA など）と、これらの検査で拾い上げられた症例を対象とする直接造影法（経皮胆管造影、内視鏡的逆行性胆管造影、手術的胆管造影）とがある。コンピュータ断層撮影（以下 CT）は、その情報量、経済性、便宜性、被曝量などを考慮すると、これら二者の間に位置する検査といえる。

すなわち、スクリーニング検査において的確な情報を得られなかった場合に、あるいは得られた情報を確認し、直接造影検査の適応と選択とを決定する目的で行われる検査と考えられる。上記のスクリーニング検査、とくに超音波検査から得られる情報は、検査者の技術に負うところが多い傾向はあるが、総じて満足すべきである。したがって CT の役割は、胆道系に関するかぎり大きいとはいえないが、その客観性と易読性には捨てがたいものがある。

CT の一般的な胆道系への適応については、具体的にどのような疾患に有効かという点、まず閉塞性黄疸と胆嚢癌があげられる。

* Tsutomu ARAKI 東京大学医学部・放射線科